

## この4年間を振り返って～あるお母さんの気持ち～（2015年9月 寄せられた手記より）

私は宮城県仙台市在住の母親です。現在、自分なりの放射能対策をしながら2人の子どもを育てておりますが、日々の生活が心から安心だと思えることはありません。仙台は空間線量が比較的安く、考えすぎだと思われるかもしれませんが、子ども達の将来を思うと、やはり不安なのです。そして、東日本大震災、福島第一原子力発電所の事故が起こった、当時のことを思い出すと、4年過ぎた今も後悔の念で胸が苦しくなるのです。

### 【得体のしれない放射能との出遭い】

私は、あの事故が起きて初めて「放射能」というものに自分なりに真剣に向き合うようになった人間です。それ以前は〔私には直接関係ない問題〕と無関心でおりました。いえ、本当はもっと悪くて、新聞の広告等で、イメージキャラクターだった鉄腕アトムが「安全に処理しています」と説明するイラストを見ては、本当に安全なのだろうか？と疑問を感じていたのに、〔自分にはどうしようもないレベルの話〕と、それに気付かないふり、見ないふりしていました。そのため、事故が起こった当時、知識は乏しく、また、津波被災者のことを思えばわがままを言うてはいけなないと、放射能対策を後回しにし、子どもを買い出しや、知人への差入れ等に付き合わせ、散々被ばくさせてしまったのです。そして、取り返しがつかなくなった頃にやっと、放射能に関して考え始め、「どうなってしまうのだろう」「子どもに何かあったら私の責任だ」という思いになり、大変怖くなりました。生まれて初めて経験する、得体のしれないものに対する恐怖感には本当に凄まじいもので、何をしたらよいのか、という具体案を考えるよりも、まずはそれに負けないようにすることが、私がとらなくてはならなかった最初の対応でした。

### 【放射能の影響は未知数】

放射能とはどんなものなのか、人体にどんな影響を与えるのか、そして影響を少なくするためには何をしたらよいのか、といった疑問に対する答えが自分の中に全くなく、「怖い」という思いをさらに大きく感じていました。そこで私は知識を頭に入れるため、ネットでの情報収集や、読書、講演会参加などを行いました。特別に賢い訳でもない「普通のお母さん」の私が理解できる内容など、ごく限られたものではありましたが、少しずつ「放射能」に関することが分かってきました。けれど、「放射能」のことを知れば知るほど、その問題のとてつもない大きさにますます怖くなるのです。当時の私に立ち向かう術は見つけれず、何度も泣きました。それまでそうしてきたように、「大丈夫」ということにして逃げたくもなりました。

大きな問題に向き合うには、勇気と覚悟がいるものだと感じました。

### 【自分に精一杯できること】

放射能影響に関して、「専門家」と呼ばれる方々の意見は実に様々でした。それなのに一定の意見だけを重視し、「安全」であろうとする政府や行政の姿勢にも疑問を感じました。交通安全運動やインフルエンザの注意喚起は、小さな危険性にも注意を払って考えられているようですが、何故放射能に関しては真逆の対応をするのか、私にはよく分かりませんでした。子どもたちの今後のことを考えると、「あの時、気にしすぎだったね」と将来苦笑いすることになってもいい（むしろ、そうなればいい）、「念のため」という感覚で、そして、「放射能が人体にどんな影響を与えるのか、与えないのか、後になってみなければ分からないから、大丈夫と鵜呑みにしないで、自分にできることをしてみよう」と思ったのです。

それから今に至るまで、「これは買う、買わない」「食べない、食べさせない」「これはする、しない、させない」という様々な判断を日々積み重ねています。限られた食材の中で、毎日食事のメニューを考えています。ガイガーカウンターやシンチレーションカウンター、ヨウ素剤の購入、保養に出かけるといった事も行いました。保養というのは、空間線量の低い地域で過ごし、身体的、精神的な回復を図るものです。1番長い時には、夏休みの1ヶ月間を保養先で過ごしました。移住を考えたこともありましたが、実行には移せませんでした。先に述べた食材にしても、全てを安全と思える物で揃える事はできませんし、ひとつひとつの判断が正しかったのか悩むこともあり、正直嫌になります。そんな風に来る事、出来ないことはありますが、これまで無関心でいた自分の責任を思うと、向き合わなければいけないと感じ、今の私に出来ることをする、という考えを中心に毎日を過ごしています。



### 【汚染地域での暮らし～揺れ続けています～】

これまでに何度も「気にしても自分の力ではどうしようもない」「気にしていたら生活出来ない」という言葉を聞きました。それは今も変わらないか、むしろ増えたようにも思います。確かに、問題の根本的な解決が難しいこと、これまで通りの生活が出来なくなる不便があること、そして、自分の限界があることは事実です。こうすれば大丈夫という答えが確固たるものとして存在してはいないし、どちらを見ても不安になることばかりです。それならば、気にしないで生活した方がいいのだろうか？ニコニコ笑って免疫力を上げることが大切だって言うし・・・、と心が揺れることもあります。時間が経つほどに疲れも出て、最近では手を抜いてしまうことも増えました。注意や対策は絶対に必要なのだと思っているのに、それを継続することの大変さを感じています。

### 【放射能は何でも壊す】

私よりずっと、放射能に対する危機感が強く、様々な対策をしているお母さん方は沢山いらっしゃいます。一番心配な食べ物の管理は勿論、洗濯物を外に干さない方。給食の産地が心配で、お子さんにお弁当を持たせる方。学校のプールに入らせないようにしている方。長期休みを中心に、可能な限り保養へ出かける方。そういった方々と出会うと、仲間と出会ったように感じて嬉しくなり、勇気づけられます。

けれど、上手くいくことばかりでもなく、助け合っているつもりだったのに、いつの間にか互いが傷ついて距離を置いてしまうこともありました。放射能に対する判断や対応には個人差があります。対応出来ることも異なります。そのため、「あの人が危険だと判断している食べ物を、自分は子どもに食べさせてしまった」「私は金銭的に何度も子どもを保養に連れていくことが出来ない」というものや、「うちは夫が無関心で苦しいのに、あの人は協力してもらえて羨ましい」「うちの子どもだけ、甲状腺にのう胞が見つかった」など、同じように放射能に苦しんでいるが故に、新たに生まれるそういった感情が人間関係にも影響を及ぼしていくのです。放射能は本当に何でも壊していくのだと、ますます悲しく、くやしくなります。

### 【不安であることが否定されることの苦しさ】

「放射能」に関しての話は、事故後すぐの時から今に至るまで、タブーとするような雰囲気があります。あれはどうしてなのでしょう？私は映画にもなり世界的にヒットした、J.Kローリングの「ハリーポッターシリーズ」の主人公ハリーの宿敵、ヴォルデモートのことを思い出します。人々は恐怖のあまりその名を口に出来ず、「名前と言えないあの人」といった呼び方をし、小声で話します。そんな中でハリーが「ヴォルデモート！」とはっきりと呼び、ついにはそれを倒していく姿に、私も「放射能が！」と大声で話して歩きたくなります。

近頃では「復興」の名の下、「放射能」と口にするのはおろか、【不安】と感じることでさえも可笑しい事と思わされているように感じます。いつも【不安】とストレスをどうコントロールするか悩んでいる身からすれば、「何もなかった」ように暮らす方が楽なのかも、という誘惑に流されそうな時もあります。

### 【最後に】

チェルノブイリ原発事故後、甲状腺がんなどの深刻な症状が多く表れてきたのは、事故の4年後からだそうです。事故から4年経った日本で、今後同様な事が起こりはしないだろうか心配しています。

今もなお、放射線量が高い地域で生活を続けられている方々、避難生活を続けておられる方々、移住をされた方々、他にも沢山の方々が、それぞれの放射能問題に悩み、苦しんでいらっしゃるのだと思います。私の想像をはるかに超える苦しみの中におられる方も沢山いらっしゃるでしょう。胸が痛みます。苦しみが少しでも和らぎますよう祈らずにはいられません。放射能問題に向き合い続ける方々の中に、私も加えていただき、共に歩いていけたらと願います。

